

徳く泉ほ報う

No.0051

発行

令和4年1月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区

榴岡3-10-3

(022)297-4248

tokusenji.sendai@gmail.com

[ai@gmail.com](mailto:tokusenji.sendai@gmail.com)



ホームページ

[tokusenji-](http://tokusenji-sendai.com)

[sendai.com](http://tokusenji-sendai.com)



Instagram

[tokusenji.sendai](https://www.instagram.com/tokusenji.sendai)



TOKUSENJI.SENDAI

令和四年 修正会 勤修

昨年はひっそりとお迎えした修正会。今年は三十名ほどのご参詣があり、みなさまで手を合わせて新年初めのお勤めをすることができました。毎年ご家族総出でお参りされるご家庭もあり、小さなお子さんも一緒に手を合わせてくださいます。その姿を見ていると、幼いころ祖母に手を引かれて近所の神社仏閣にお正月のお参りに行ったことを思い出し、何とも懐かしい思いがします。生きづらいと言われるこの世だからこそ、皆様の人生の傍に仏の教えが常に寄り添い、生きる力の助けになることを願って、一日一日大切に今年も徳泉寺にできることを模索して参ります。どうぞ変わらざるしくお願いいたします。



住職法話より



前住職法話より



十二月の書道のイベントにて今年の一字として『要』の字を書かせてもらいました。「不要不急」が言われるなか、何が「要」で何が「急」なのか、たくさん考える機会をいただきました。例えば葬儀は「要」「急」のこととして規模は小さくしても執り行われましたが結婚式や食事会、カラオケや旅行などは「要」だけでも「急」ではない「不急」として自粛が続きました。この「要」は扇の要(かなめ)です。これがないとバラバラになってしまう大切な場所です。私たちはこの変わりゆく生活の中で、「人との関わり」という大切な「要」を見失わないようにしなければなりません。確かに「不急」だけでも必要な「要」を取りもどす、そんな工夫を続ける一年でありたいと思います。

「一休さん」で有名な一休禪師がお正月に浮かれる庶民に向けて「正月や 冥途の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」と読みながら頭蓋骨のついた杖を突いて京都の街を歩いたというお話があります。昔は大晦日に一つ歳を重ねましたから、一つ歳を取るといふことは、死に一つ近づくといふことですよ、浮かれてばかりはいられませんよ、という戒めの意味を込めたのでしよう。もちろん、お正月を祝っていけない、と言っているわけではありません。私たちは自分が一番見えません。人ばかり見ている。ですから思い通りにならないことがいっぱい出てきます。この時に、実は思い通りにならないことがあるのではなく、思い通りにしたい自分がいると気づかされるわけです。いつか頭蓋骨になる私がどこにいるのか、今年も聞法をしながら知っていききたいと思えます。